第五回文部省美術展覽會水彩畫合評

H、W、L、R、

私達は未だ經驗も淺く、確實な技術をも持つていない、いはんや鑑賞の眼等、持つて居よう筈がない。それにも係わらず他人の畫を批評する等をこがましき極みではあるが、只自分達の我儘な好き嫌によつて思ひ付いた淺薄な感想を書き並べた。御世辭等至つて不馴な私達の云ひ分は隨分作者に對して失禮な事もあらう。が豆つぶの樣な奴等が何をぬかし居ると思ふてゐて頂きたい。一言作者諸氏に御詫をしてをく。今回の水彩畫は非常に少ない、僅に十一點に過ぎない。

成績に於ても點數に於ても貧弱な水彩畫室に故大下藤次郎氏の遇然の遺作が花環と喪章とをつけて陳列されている。寂しき室は一層寂しさを加へてゐる。氏もかくなる事とは夢にも思はれなかつた事だらう其開會を病床から鶴首して待つて居られたのだらうに。鑑別の結果さへも知られずに突然逝去せられて終つた其固くむすぼれた唇はもはや永劫に再び開く時とてはないのだ。遺作「やなぎ」の前に立つに及び明日をも知れぬ人生の儚なさを思ひて只むせぶのみ。哀悼の情に耐えず謹んで吊意を表する。

三三　朝　吉田博氏（全紙）

W右の遠山より中景のあたり手際よく描かれて瞬間の感じもよく捉へてあるが前景の失敗は全畫面のよき部分を沒却して不愉快な者となり了した。畫面に向つて直ぐ氣の付くのは作者の手段の餘りにあからさまに見え過ぎるのである。明るく黃色な（特に黃色な光つたのでなく）空に暗い山が出したる事や雲の配置の如何にも態とらしく見ゆるは其繪に對して尊敬の念を去らしめる。流水は、色も失敗し水も平らかでない。水に映つる雲の位置の曲りたるは著しく目に立つ。

L水彩畫中の大作。水面の凹凸に見えるのが變だ、しかしなかなれたものだ。

R私は氏の此迄の作品中で「雨後の朝」頃のものが一番好きだつた。其後年毎に段々嫌さが增して來た。今度の等も氏の作品としては會心の作とは云へない、寧ろ劣つている樣に思はれた。中景あたりに巧な技巧が見られるが、全體に調子の調つて居ない爲か、私には非常に不愉快な感じを起させた。水に映つた山や雲の影が不自然だ。氏の用ひらるる色々な手段が畫面を汚なく見せて居る。

三四　植物園　中林僊氏（OW紙四ッ切）

H畫の粗密と作畫時間の長短は、敢て名畫を作る上に何等の關係はないとはいふが、この繪がそれ程輕妙といふ譯でもあるまい。唯何處かに面白味があると言へば言へるかも知れぬがこの畫等は餘り展覽會といふものを、輕視し過ぎたものである。

W輕いスケッチ的の筆に面白味はあるが、それ迄の事で、上半面は厭だ、草花の著し方等は面白い。

L水繪具の流動的の面白味はあるが、粗雜な樣だ。

第五回文部省美術展覽會水彩畫合評

H、W、L、R、

私達は未だ經驗も淺く、確實な技術をも持つていない、いはんや鑑賞の眼等、持つて居よう筈がない。それにも係わらず他人の畫を批評する等をこがましき極みではあるが、只自分達の我儘な好き嫌によつて思ひ付いた淺薄な感想を書き並べた。御世辭等至つて不馴な私達の云ひ分は隨分作者に對して失禮な事もあらう。が豆つぶの樣な奴等が何をぬかし居ると思ふてゐて頂きたい。一言作者諸氏に御詫をしておく。今回の水彩畫は非常に少ない、僅に十一點に過ぎない。

成績に於ても點數に於ても貧弱な水彩畫室に故大下藤次郎氏の遇然の遺作が花環と喪章とをつけて陳列されている。寂しき室は一層寂しさを加へてゐる。氏もかくなる事とは夢にも思はれなかつた事だらう其開會を病床から鶴首して待つて居られたのだらうに。鑑別の結果さへも知られずに突然逝去せられて終つた其間くむすぼれた唇はもはや永劫に再び開く時とてはないのだ。遺作「やなぎ」の前に立つに及び明日をも知れぬ人生の儚なさを思ひて只むせぶのみ。哀悼の情に耐えず謹んで吊意を表する。

三三　朝　吉田博氏（全紙）

W右の遠山より中景のあたり手際よく描かれて瞬間の感じもよく捉へてあるが前景の失敗は全畫面のよき部分を沒却して不愉快な者となり了した。畫面に向つて直ぐ氣の付くのは作者の手段の餘りにあからさまに見え過ぎるのである。明るく黃色な（特に黃色な光つたのでなくてもそれに嗜い出を出したる事や雲の配置の如何にも惡とらしく見ゆるは其繪に對して尊敬の念を去らしめる。流水は、色も失敗し水も平らかでない。水に映つる雲の位置の曲りたるは著しく目に立つ。

L水彩畫中の大作。水面の凹凸は見えるのが變だ、しかしなかなれたものだ。

R私は氏の此迄の作品中で「雨後の朝」頃のものが一番好きだつた。其後年毎に段々嫌さが增して來た。今度の等も氏の作品としては會心の作とは云へない、寧ろ劣つている樣に思はれた。中景あたりに巧な技巧が見られるが、全體に調子の調つて居ない爲か、私には非常に不愉快な感じを起させた。水に映つた山や雲の影が不自然だ。氏の用ひらるる色々な手段が畫面を汚なく見せて居る。

三四　植物園　中林僊氏（OW紙四ッ切）

H畫の粗密と作畫時間の長短は、敢て名畫を作る上に何等の關係はないとはいふが、この繪がそれ程輕妙といふ譯でもあるまい。唯何處かに面白味があると言へば言へるかも知れぬがこの畫等は餘り展覽會といふものを、輕視し過ぎたものである。

W輕いスケッチ的の筆に面白味はあるが、それ迄の事で、上半面は厭だ、草花の著し方等は面白い。

L水繪具の流動的の面白味はあるが、粗雜な樣だ。

R輕い達者なものでは有がもつと物の説明が欲しい。只繪具を紙の上へ流す丈けでは困る。

二五 綠色の流　赤城泰舒氏（半切）

W君の繪に對すると何時でも自然といふものが君を通じて一種崇高の感を吾々に與へる。此の繪等も矢張り其通り。穩かなる自然が何か神秘的に現はれて。或目に見えぬ何物かを囁く樣に思はれる。全體に漲ぎる暖き色調は人を魅する力を持つて居る、强て難を云へば、左り手の山の傾斜の見へぬ事と畫面の中心の何となく物足りない點である。

H就中柳の樹の連續して居る中景のあたりから水邊に移る處などいゝ。

三六 日比谷の午後　後藤工志氏（四ッ切）

W水彩畫中出色の繪である。いら〳〵した夏の午後の日を眞向に浴びたる草原の、面白き迄に畫きなされ蜻蛉追ふ兒等の點景も相應しく大膽にして要領を得たる筆致のよく働いて心持のよい繪を成して居る。年齒尙若く日本水彩畫會研究所中無二の勉强家たる君にして此作ある亦偶然ではなからふ。

L色も感じも面白いと思ふ、筆にも味がある。

R私も同感だ。ことに無邪氣な眞面目な態度が喜しい。この上物體と物體との間の説明がもつと見えたらいゝだらうと思つた。

三三 サンミシエル橋畔　石井柏亭氏（四ッ切？）

W比較的平凡な構圖を捉へゐて新らしく見せた作者の手腕は敬服に値する。全體に落付いた色調でコマ〳〵した建築も、うるさくなく物質に拘束されない筆は自在に走つて居る。動いている水は殊によい。

Lコンテー畫へ水繪具を塗た別趣味のある繪である。あの樣な規則正しい建物を味のある線でこなしてある處は流石デッサン主義の人だけあると思つた。

R目新らしい丈に面白く感じた。無造作の樣な線に面白味がある。左半の感が好きだ。色と云ひ描き方と言ひおちついて居て愉快だ。

H然し時間と云ふ事に就いては、少しも考へる事が出來なかつた。

三八 池畔の森　水野以文氏（半切）

Rうわついてゐない正直なあくまで眞面目な處に君の個性が表はれて居て捨て難い趣きがある。中央の森から水にかけて心持よい感を覺へる。只色の寒いのと山の面の見えない事ゃ森と山との距離の見えないのが欠點かと思つた。

四〇 曇りの夕　同人（四ッ切）

Rやはり大きい方がいゝ。餘り一調子に成り過ぎた樣だ。遠景は先へ行かず其中の燈丈前へ飛び出して居る樣に思はれる。

四一 北國街道　茨木猪之吉氏（四ッ切）

W淋しい田舍の非常に透明した畫き憎い自然を比較的樂にやつてのけてあるが別に面白い繪でもない。點景人物の比較は如何にや。空と山の境の線の强く出たるは目障りである。

R點景や遠景が氣に成つて仕方がない。寒そうな感はあるが干からびた樣だ。

四三 白耳義の田舍　三宅克巳氏（四ッ切？）

Wコセ〳〵した筆で色も厭味だ。

L、R同感だ。

四四 白耳義**ブルージ**町の橋　同人（半切）

W老練の筆致は巧に働いて居るが色があまり一樣で濕ひなくどの繪にも見へる一種のブラウンがあまり多過ぎる。空等も餘程不思議である。

L前のよりもこの方を採る。

R描法も色彩も氏獨特のものだ。總てを通じて重々しいあくどい感を起させる。

箱根古道の秋（遺稿）

汀　鷗

電車を下りた時は七時を過ぎてゐた、小田原は夜中のやうに靜かだ、秋の日は短かい。今夜は何處でもよいと思つたので、家名も見ず旅人宿といふ看板見當てに、とある家に入つた。通された二階の座敷には、うす暗いランプが置いてあつた、他には客の氣配もしない。生ぬるい茶を一口味はつて下に置いた時、睡むさうな顏した小女（こをんな）が膳を運むで來た、玉子の吸物、青い皮の小魚、冷たい飯を一二杯、まづいと思ひながら食事を終つた。

再び外套を着て靴を穿いて、早川口に住はるゝ蓍師の未亡人をだづねた、木の葉を捲き砂（いさご）を飛ばすうら寒い風に吹かれて、宿へ歸つて見ると座敷には寢床が敷かれてあつて、火鉢の火は消えてゐた、風呂もないらしい、寢衣も來てゐない、詮方なしに上衣を脱いで、硬い薄團の上に横たはつた。

湯本に泊つたなら、暖かい飯にもありついたらう、心地よい湯にも入（はい）れたらう、そのかはり、先生の奥樣の、あのやうな喜ばしひお顏を見ることは出來まい、奥樣の眼には涙が見えた、昔しのお弟子は澤山あるが、先生亡き今日では、あまり訪ねて行く人も無いとの話だ、よい事をしたと思つたら、宿屋の冷たいもてなしにも不足はなかつた。

裏の木戸は風に煽られて居る。（十一月十日）

湯本に着いたのは八時半であつた、岩崎邸の前を通り、近道を元湯本の村へ出た、こゝは箱根舊道の入口で、段々上りの家の作りが面白い、綠の苔蒸した石垣、何百年の間多くの人に踏れて磨かれた滑らかに光る敷石、赤い實をつけた柿の木、暗い杉の森、明るい芝草山、それ等が都合よく配列されてゐて、一歩々々變化しつゝも、村の盡くるまで、繪の樣な景色は連續した古風な家の中では　　か頻りに動いて、主人は挽物細工に餘念がない。

箱根古道の秋は淋しい、父は參勤交代のお供をして、東海道は三十三度通つたと、いつも昔話をせられた、箱根の石高道は駕籠にも乘られたらうが、草鞋はきしめて歩るかれたこともあらう、わが足下の圓石は、四十年前に父の踏まれたものかも知れない、と思ふと、道端の大杉も懷かしく足の運びも捗取らなくなつた。